

## 絵画空間に展開する二重的空間の構築について

### — 東アジアにおける画中屏風絵を通して —

《キーワード》 絵画空間 二重空間 画中画 屏風絵

王 元 林

#### はじめに

屏風は中国の春秋戦国時代に発生し、二千余年、中国の文化と共に、永い歳月をかけて洗練され、実用と装飾を兼ね備えた調度品として愛用されてきた。ことに五代から宋時代にかけて画中屏風絵は、その絵画の空間構成と造形理念を共有しつつ、人物画の背景としての山水図屏風を配し、その手法は、はるか明・清時代の人物画にまで通じるものである。また、人物図に描かれた画中屏風絵の図様は、五代から明清時代に至るまでの数多い伝世作例の中にみられるが、それに加えて最近の考古学上の貴重な成果と合わせて検討すると、その淵源は前漢時代の墓葬壁画に遡ることが判明する。その影響を受けた五代から明清までの画中屏風絵の系譜については、伝播と受容の諸相を分析することが、重要なテーマであり、それは本論の主眼点となる。

本論は東アジア、特に中国における屏風絵について、画中に描か

れた屏風絵に注目することで、「二重空間のイメージ」という視点から考察を行うものである。

#### 一、画中屏風絵の史的考察

画中屏風絵に関連する絵画作品の画題と形質については、次のように分類することができる。肖像画、高士・逸士など人物故事図、孝経絵巻などを画題としている絵画作品には、画中屏風絵がよく描かれている。また、伝世絵画・墓葬壁画・建築壁画など異なる形質の絵画中にも、画中屏風絵が見られる。後述するように、十・十八世紀に属する数多くの作品のうち、特に五代・宋元時代の作品を比較し、参考とするのに適したものを数点取り上げてみる。これらの絵画に描かれた衝立画像は、その前後へとわれわれを引きまわし、ある特定のタイプの絵画的表象や、視覚的認識をめぐる独特な様式や、文化的空間の不思議な配置などを提示する。

まず、各時代における重要な作例を挙げていく。なかでも注目すべきものとして、五代・王齊翰「勘書図」(図1)、周文矩「重屏図」があり、ほかに宋人「人物図」、元「張雨題倪瓚画像卷」、劉貫道「銷夏図」、そして明・杜堇「玩古図」、唐寅「李端端図」、清・黎明「傲金廷標孝経図」、禹之鼎「人物肖像図」、姚文瀚「弘曆鑑古図」などがある。

五代南唐時期の著名な人物画家である周文矩の「重屏会棋図卷」(絹本着色、縦四〇・三cm、横七〇・五cm、北京・故宮博物院蔵)は、画面中で、坐っている南唐中主の李璟(九四三〜九六一在位)がその四人の一族とともに囲碁をたのしんでいる。かれらの背後には黒い枠の衝立が立てられており、その画面には、再び人物活動の場面を表現して、またその奥に画中の屏風として三曲の水墨山水屏風が描かれている。<sup>1)</sup>山水図を描いた屏風の前の榻では、転寝する白楽天が描かれている(図2)。このように描かれることから、これを重なった「重屏」つまりダブル・スクリーン(double screen)を描いた名作という。このような画面構図は三重空間を表現し、幽深な奥感をもつ。会棋の場面後方の、白楽天の「偶眠」詩意が表現されている屏風の画面にも、また平遠山水屏風が描かれている。この重屏図は前、中、後の三景から構成されて、厳密な透視遠近法がとられている。

元代の巨匠である劉貫道(活動期一二七九〜一三〇〇)の絵画において、周文矩が創造した「ダブル・スクリーン」(重屏)の定式<sup>2)</sup>は、新しい流行に適合するように劇的に改められた。「銷夏図」と題する劉貫道の絵(図3)は、竹とバナナが繁る庭に置かれた低い

寝椅子に、ゆったりともたれている文人を描いている。彼は左手に卷子本、右手に払塵(払子)をもっているが、どちらも隠遁した知識人にとっては伝統的なシンボルである。こうした二重画像のモチーフは、明らかに「重屏」すなわちダブル・スクリーンの画像に由来するものである。しかし、すでに見てきたように、あらゆるダブル・スクリーンにおいて、主たる画像は常に前景にあり、衝立上の画像は、その主たる画像の「こだま」として現れる。

宋人「人物図」(台北・故宮博物院蔵)の屏風山水図(図4)は、中国山水画の基本構図の一つとなる一水兩岸構図を採る。向かって右に此岸、間に水面、左に彼岸を配して、此岸に大樹、彼岸に主山を置く点は、前時期の曲陽五代王処直墓前室北壁「山水図壁画」や、同時期あるいは北宋末南宋初の「岷山晴雪図」(絹本墨画淡彩、一五・一×一〇〇・七cm、台北・故宮博物院)に通じる。また「弘曆(乾隆)鑑古図」(北京・故宮博物院蔵)は、清・乾隆時期の院画家の姚文瀚が行楽図の一種として描いたものである(図5)。本図は、構図や意匠などが宋人の「人物図」冊から模写したものと推定されている。その画中の家具や調度は、清宮中の御用品に変化しているが、いずれも画中画屏風絵の手法で三次元空間の視覚意識を現わしている。しかしながら、本図は宋人の人物図の画中画として屏風小景山水花鳥図から大型屏風山水図に転換され、前者に存在する瀟洒な文人氣息も強く表れている。<sup>3)</sup>また、作者不詳「一是一二(または乾隆鑑古図)」(北京・故宮博物院蔵、十八世紀、紙本画軸)もある。その構図と画中山水図屏風を姚文瀚の作品からとったと考えられている。

